

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13519

研究課題名(和文) 高校教育にとって「学級」とは何か 学級の教育的意義に関する調査研究

研究課題名(英文) What is "Classroom" in the context of a Japanese high school?

研究代表者

中村 高康 (Nakamura, Takayasu)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授

研究者番号：30291321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで高校についてはほとんど顧みられることのなかった「学級」にあえて注目することで、現代の高校教育システムがいかなる暗黙の規範に縛られているのかということ、従来とは全く異なる視角から明らかにすることを目指すものである。研究の結果、調査対象の商業高校では「学級」は集団を均等に配置する装置として使用されていること、工業高校と比べて商業ではその傾向が顕著であること、また高校生にとっては「学級」は無意味ではないが他の教育的カテゴリーの一つとしての位置づけが与えられるものであることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

専門高校のように教育内容が専門的に分化していたり、進路が大きく分かれたりしていても、そうした教育内容や進路が学級編成の現実とぴったりと反映するとは限らず、そこには様々な教育的配慮から別の教育的カテゴリーとして、時に学級が活用されていることが本研究の事例から強く示唆されることになった。このことは、高校教育にとっての「学級」の意味を再評価することにもつながっていく。ただし、高校における「学級」は小学校や中学校と比べた場合には大きな意味を持っているとはいえない。今後はさらに高校における教育カテゴリー使用の意味を問う研究を深めていく必要性が明らかとなったといえる。

研究成果の概要(英文)：This study aims at revealing the meaning of Japanese high school system, through examining "classroom" in the context of a commercial high school in the area of Kansai in Japan, which was also our research target 10 years ago. The findings of this study are as follows; 1) The school uses a category of "classroom" as equalizing students' groups in terms of grades, characters, their courses, etc. 2) This tendency is stronger at the commercial high school than two technical high schools, according to our re-analysis of our panel survey to the same commercial high school about 10 years ago. 3) The category of "classroom" at the high school is not important one, but one of several educational categories.

研究分野：教育社会学

キーワード：高校教育 社会学 学級 調査

1. 研究開始当初の背景

従来、高校教育研究において「学級」はほとんど注目されてこなかった。「学級」を単位として問題とするのは、しばしば「学級担任制」である小学校段階であり、せいぜい、教科担任制ではあっても生徒指導などで「学級」の意味が相対的に高校より大きい中学校までである。高校においては、基本的に「学級」に対して、研究上も、また学校現場においても、さほど大きな議論にはなりにくかったのである。昨今では、コース制や選択科目の増加なども加わり、ますます高校における「学級」の意味は見出しにくい状況がある。

しかし、実際の制度的状況はこの印象とは矛盾する。高校においても制度的には「学級」は厳然と存在している。特殊な学校でないかぎり、どの高校生にも「年組」という所属が割り振られている。現実にはあまりリアルな意味を見出しにくい存在である高校の「学級」がなぜ、かくも強固に制度的基盤を与えられているのか。この問題への回答次第では、現在の高校教育システムの基本的設計そのものが揺らぐような大きな問いであるにも関わらず、これまでの研究ではこの点にメスが入ることはなかったのである。

2. 研究の目的

本研究は、これまで高校についてはほとんど顧みられることのなかった「学級」にあえて注目することで、現代の高校教育システムがいかなる暗黙の規範に縛られているのかということ、従来とは全く異なる視角から明らかにすることを目指すものである。その際に、本研究では「学級」の意味を、当事者である高校生の情報だけではなく、高校を既に卒業した成人や当時の学級担任の視点から描き出す。こうした点を検討することにより、高校における「学級」がいかなる教育的意義を持ちうるのかが検証され、「学級」を自明視して成り立っている現代の高校教育制度の在り方そのものに重大な問題提起をしうる知見が生み出されることが大いに期待される。

3. 研究の方法

本研究では、上述の目的を達成するため、複数の方法を用いて課題に接近した。

調査の基本としては、申請者がかつて実施した高校調査のフィールドの一つであった、関西圏の商業高校の1クラス(3年4組)を対象として、これに関連するデータを再収集するというものである。具体的には、卒業およそ10年を経た現在の視点から当時を振り返ってもらう形の半構造化インタビューを、当時の担任教師および在籍者に対して実施した。

第二に、振り返りのインタビューデータのみには依拠するのではなく、過去の調査データをフルに活用して、在籍当時の記録やアンケート回答、インタビュー記録などの再分析をおこなった。特に、量的データの再分析では、パネル形式の調査設計になっていることから、事後的に学級編成について再構成することが可能なデータとなっており、そこから工業高校と比較した場合の当該商業高校の学級編成の特質にも接近した。

第三に、現在の「学級」を見ることで、仮説生成的に立ち上がってきた「学級」の意味を確認・検証する。具体的には、同じ商業高校の現在の教員へのインタビューおよび在籍高校生に対して、インタビューやアンケート調査を実施することにより、学級を含む様々な教育カテゴリーの主観的意味を抽出することを目指した。これにより、学級の意味を直接検証できるデータを確保するとともに、10年以上前に実施した調査との比較データを作ることとも可能となり、様々な角度から高校の中に張り巡らされた学級や系統といった教育カテゴリーの実質を分析した。

以上により、多様な視角から「学級」の意味を立体的に明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

(1) 卒業生および元担任教師インタビュー

第一の方法、すなわち当時のX商業高校3年4組担任A元教諭および元3年4組生徒へのインタビュー調査は、研究初年度におこなわれた。

卒業生徒へのインタビューからは、「クラス」というカテゴリーが必ずしも明確な印象を与えていないことが示された。それは、卒業生同士のクラスでのつながりが十分ではないことを意味しており、結果として卒業生をたどっていく形の調査は困難であることも明らかとなったため、翌年度以降の調査設計を修正する形をとることになった。

またA元教諭のインタビューでは、A元教諭がその学年のクラス編成の中心的位置にいたことが明らかとなり、その経緯をいろいろ尋ねることができた。その結果以下のような諸点を意識して当時の3年生のクラス編成を行ったことが明らかとなった。

・系統や選択科目は授業だけ移動するようにして、クラス自体はそれでわけけるのではなく、基本的にはフラットに(つまり特徴ある生徒や成績の良い生徒が固まったクラスにならないように)編成した。

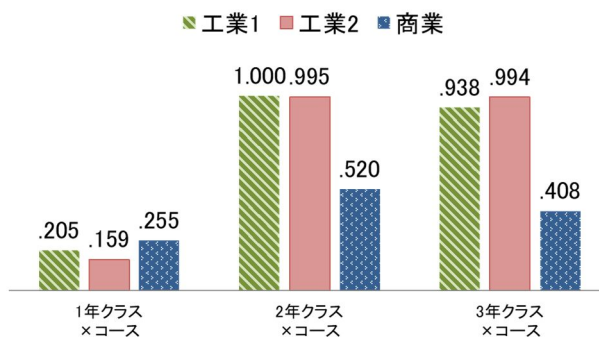
- ・例外としては6クラスのうち1クラスだけ進学希望者が多いクラスを作った。
- ・商業高校は男子生徒が非常に少ないため、ばらばらにせず2クラスに集中して配置。「2つしか作れないんですね。男子が合計で14もいなかったと思うので、でー、5より減っちゃうと男子も生きていけないので」(A元教諭のコメントより)

(2) 前回調査データの再分析

第二の方法は、前回調査データの再分析であり、研究初年度より最終年度まで継続的に検討が行われた。実際に検討された資料・データは様々であり、当時の学校資料、当時の観察・インタビュー記録、5回分(+卒業1年目の追跡調査1回分)のアンケート調査データである。

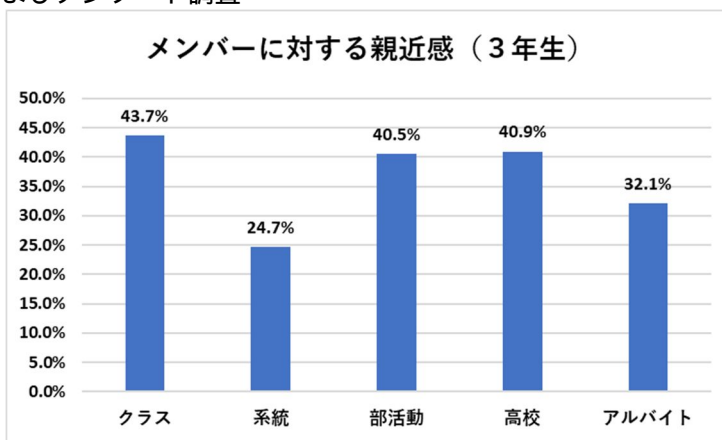
分析は多岐にわたっているが、その中でも本研究課題にもっとも関連のある分析結果は、当時のX商業高校のクラス編成の特質の解明であり、その結果を例としてここで示しておく。

上述のように、インタビューでも教師の主観的意味付けは明確になっているが、実際のクラスがどのような生徒によって構成され、学年進行とともに変化していったのかは、数値的に跡付けることができた。以下の図は、学年別にクラスと専門コースの関連度(クラメールのV)を示した図であるが、同じく専門高校である工業高校2校に比べて、明らかにX商業高校は専門のコースがクラス編成に関連している度合いが低い。これにより、上述のインタビューにおける「フラット」という元教諭の説明を裏付けることができた。



(3) 現在の高校へのインタビューおよびアンケート調査

第三の方法は、現在の高校の教師及び生徒に対するインタビュー、生徒に対するアンケート調査である。以上の研究成果を踏まえて、「学級」を含む様々な教育カテゴリーがどのような位置づけを与えられているのか、高校生の主観的意味を探った。以下のグラフにみられるように、様々な教育カテゴリーはそれぞれX商業高校生の中では同程度の意味を持っている。一方で、相対的には、学校外の活動であるアルバイトや課外活動である部活動とも量的には大きく異なっていないという意味で、とりわけ3年生にとっての「学級」の意味は微妙な位置にあることも明らかになった。



(4) 研究成果のもたらす意義

専門高校のように教育内容が専門的に分化していたり、進路が大きく分かれたりしていても、そうした教育内容や進路が学級編成の現実にぴったりと反映するとは限らず、そこには様々な教育的配慮から別の教育的カテゴリーとして、時に学級が活用されていることが本研究の事例から強く示唆されることになった。このことは、高校教育にとっての「学級」の意味を再評価することにもつながっていく。ただし、高校における「学級」は小学校や中学校と比べた場合には大きな意味を持っているとはいえない。今後はさらに高校における教育カテゴリー使用の意味を問う研究を深めていく必要性が明らかとなったといえる。

なお、本研究の成果については、すでに出版社との協議が進み、図書としての刊行が内定している。研究計画年度内での刊行には至らなかったが、研究をさらに継続して進め、最終的な成果物として上述の研究結果を公表していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 富田知世・小黒恵・中村高康
2. 発表標題 高校の教師はどのようにクラスを決定しているのか 関西圏の商業高校と工業高校を事例として
3. 学会等名 日本教育社会学会第68回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中村高康・富田知世・小黒恵編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 未定
3. 書名 高校生の生活・進路・集団編成 分類装置としての「教育カテゴリー」 （仮題）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

X 商業高校2008年3月卒業生調査 http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~tknaka/followup-study

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	富田 知世 (Tomita Chiyo)	大月市立大月短期大学・助教	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小黒 恵 (Oguro Megumi)		
研究協力者	小西 尚之 (Konishi Naoyuki)	金沢学院大学・准教授	
研究協力者	山口 泰史 (Yamaguchi Yasufumi)	東京大学・社会科学研究所・特任研究員	
研究協力者	布川 由利 (Nunokawa Yuri)	高崎健康福祉大学・助手	